ハロウィーンとゾンビ

佐々木　隆

プロローグ

日本のハロウィーン概要についてはこれまでにも論じてきたが[1]、コスプレの原点については拙著「ハロウィンとコスプレ」[2]で『タコマタイムズ』(1912 年 5 月 24 日）の記事、1939 に開催された第一回ワールドコン（the World Science Fiction Convention)でフォーレスト・J・アッカーマンが SF のキャラクターに仮装したものが最初であると紹介した。日本でもコミケなどによりコスプレが定着し始めると、コスプレは多様化し日本ではハロウィーンと結びつくようになった。

ハロウィーンはドルイド教の行事にキリスト教の行事が融合し、アメリカで商業化され、日本では若者の新しいイベントとして定着した。[3] イベントの中心は「コスプレ」ということになる。コスプレの中でもここ数年増えているのが「ゾンビ」である。本稿ではハロウィーンとゾンビの関係について考察してきたい。

1　ハロウィーンと死者

ドルイド教が形成したケルト文化の “Samhaim”（サムヘイン祭）に起源をもつハロウィーンには、収穫祭と死者の魂が現世に戻る、いわゆる「死者の日」としての祝祭の 2 つの意味がある。[4][5] 死者が地上に現れる日として捉えることもできる。

> Samhain was also perceived of the one night of the year when the dead walked the landscape. [6]

10 月 31 日～11 月 2 日あたりに行われるメキシコの「ディア・デ・ムエルトス」（Días de los Muertos）、8 月に行われる日本のお盆も同様である。ディア・デ・ムエルトスの場合にはその時期もハロウィーンとほぼ同様である。

> DAYS OF THE DEAD－In Latin American countries the first and second of November－ALL SAINTS' DAY and ALL SOULS' DAY－are known as the "Days of the Dead," or *Días de los Muertos.* (7)
>
> ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
>
> Halloween finds an odd reflection in the *Días de los Muertos,* or Days of the Dead, directly corresponding to All Saints' Day and All Souls' Day, on November 1 and 2. (8)

ディア・デ・ムエルトスについては古くは映画の父とも言えるソ連のセルゲイ・エイゼンシュテイン監督『メキシコ万歳』（1931）や最近では、ピクサー・アニメーション・スタジオ製作、ウォルト・ディズニー・スタジオ・モーション・ピクチャーズ配給によるリー・アンクリッチ監督『リメンバー・ミー』（2017）が記憶に新しい。死者の象徴として骸骨となった死者が登場するアニメーション映画である。

2　「ゾンビ」とは何か

死者の魂が現世に戻るいわゆる「死者の日」として意味のあるハロウィーンは当然、死者との深い関係がある。

> ...back to the very beginnings of the holiday, as a day when the

sun died, the night ruled, and the souls of the dead walked. Certainly there is a considerable body of ghost stories (or tales about malicious FARIES) surrounding SAMHAIN, and there is even a Catholic legend that ODILO initiated ALL SOULS' DAY because of a story he heard about the wailing of suffering souls.(9)

死者が蘇るという点ではゾンビ（zombie）と共通するところもあるが、そもそもゾンビとは何か。

そもそも「ゾンビ」という単語は、ヴードゥー教と同じく西アフリカにルーツを持ち、コンゴ語の「nzambi（神）」「zumbi（呪物）」と関連性があるといわれている。その意味するところは、ハイチ伝承における生ける屍である。

ゾンビは幽霊ではなく、死後に息を吹き返した人間とも違う。彼らは魂を失った死体であり、ヴードゥー呪術によって生きているかのように行動する。(10)

Roger Luckhurt. *Zombies: A Cultural History* (2015)ではヴードゥーについて次のように述べている。

ヴードゥー（Voodoo）の語源であるアフリカ・フォン語の *vodun* は、大ざっぱに訳せば「精霊」となる。全人類の諸事を通じて過去と未来、この世とこの世ならざるものとを結ぶ、不可視の精神的エネルギーを指す言葉だ。ヴドゥ（Vodou）教の歴史研究者たちによれば、フランスのダホメ王国（現在のアフリカ・ベナン）の人々をあまりに多く奴隷としたため、精神的な信仰もほぼまるごと輸送されてしまったと言われている。(11)

伊東美和によればゾンビが作られる理由として以下を挙げている。

1　無賃金の労働力
2　犯罪者の刑罰
3　復讐として対象の人間をゾンビ化[12]

伊東によれば、ゾンビがアメリカで紹介されたのは 1920 年代末のことで、ウィリアム・シーブルック『マジック・アイランド』(William B. Seabrook. *The Magic Island.* New York: The Literary Guild of America, 1929)がその契機であるという。[13] いわゆるゾンビの描写が出てくるのは "Part Two BLACK SORCERY"の "Chapter II DEAD MEN WORK IN THE CANE FIELDS" である。「第 2 章　死者がさとうきび畑で働く」というショッキングな章立てとなっている。

As Polynice talked on, I reflected that these tales ran closely parallel not only with these of the negroes in Georgia and the Carolinas, but with the mediaeval folk- lore of white Europe. Werewolves, vampires, and demons were certainly no novelty. But I recalled one creature I had been hearing about in Haiti, which sounded exclusively local — the zombie.

It seemed (or so I had been assured by negroes more credulous than Polynice) that while the zoinhie came from the grave, it was neither a ghost, nor yet a person who had been raised like Lazarus from the dead. The zombie, they say, is a soulless human corpse, still dead, but taken from the grave and endowed by sorcery with a mechanical sem-blance of life —

it is a dead body which is made to walk and act and move as if it were alive. (14)

The Magic Island で“zombie”の単語が最初に登場するのは上記の通りである。ゾンビのようなものはハイチ以外に聞いたことがないと述べている。シーブルックの著はアメリカ占領下におけるハイチでの体験がもとになっており、ブードゥー教の儀式によるゾンビの記録である。

本来西アフリカにルーツを持つブードゥー教であるが、アメリカでのゾンビはハイチからのものである。なぜ、ハイチなのか。それには政治的な背景がある。ハイチは 1804 年に史上初の黒人共和国としてフランスから独立したが、不安定な政情が続き、1915 年にアメリカが海兵隊を送り、占領、軍政下においた経緯がある。アメリカが未知の国・ハイチを占領し、関心を持った中でシーブルック『マジック・アイランド』(1929) が発表されたのである。Ozzy Inguanzo. *Zombies on Film: the Definitive Story of Undead Cinema* (2014) では次のように述べている。

Prior to *Night of the Living Dead*, zombies had been almost exclusively derive from Haitian folkore, and were associated with voodoo cults and mind control as depicted in *White Zombie* (1932). (15)

『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』が登場する以前の「ゾンビ」というものは、ほとんどの場合が必ずハイチの民間伝承に由来し、ブードゥー教信仰とマインド・コントロールがセットになった存在だった—『ホワイト・ゾンビ（恐怖城）』(1932) が描いたようにである。(16)

もともとは宗教的な儀式とも深く結びついていたゾンビであるが、その後は宗教的なものを離れ、むしろエンターテイメントの世界ではホラーと結びついていくことになる。

英語に「ゾンビ」(zombie)が登場するのは 1819 年であるという。

> ロバート・サウジーというイギリスの詩人が、ブラジルの歴史を翻訳したとき初めてその言葉が使われた。西洋では、現在のゾンビと同じような意味でグール（Ghoul＝人喰い鬼）という言葉もよく使うけど、これはアラブ起源の言葉で、中米のゾンビとはだいぶ違う。(17)

インターネット上の"BOOKS: *The Zombie of Great Peru* by Pierre–Corneille Blessebois Interview with translator Doug Skinner"には以下のような説明がある。

> *The Zombie of Great Peru: Or the Countess of Cocagne* was written in 1697 by Pierre–Corneille Blessebois, (not to be confused with Pierre Corneille, the dramatist). Doug Skinner has recently translated the book from French to English for Black Scat Books, which describes the novel as "a memoir of occultism, seduction, slapstick, and humiliation, set in the racial and sexual hothouse of colonial Guadeloupe. It contains the first appearance of the word 'zombie' in literature."
> *The Oxford English Dictionary* credits Lake Poet Robert Southey as the first English writer to use the Z-word, in his 1819 History of Brazil, so Blessebois scooped him by more than 100 years in French. (18)

ゾンビはヨーロッパにしろアメリカにろ全く未知の文化からやって来たもので、キリスト教とは全く異なる背景を持っている。

ゾンビを英語圏に広めたのはラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）である。

> It was in 1889 in the pages of *Harpers Magazine* that the zombie made its debut appearance in the English-speaking world, in a short article by journalist and amateur anthropologist Lafcadio Hearn entitled "The Country of the Comers-Back". Although the term "zombie" was first recorded in *The Oxford English Dictionary* in 1819, and was frequently heard mentioned by slaves in America' s Deep South in the latter part of the 18th century, it was Hearn's article that became the first widely circulated report of the existence of the living dead. (19)

ハーンは2年間、マルティニーク島に滞在していた。ラックハーストはシーブリックと、ここでは時系列でもその第一に位置するハーンに注目する。

> 曖昧模糊としてまとまりのないzombiが、カリブ海地方の迷信から世界的な「ゾンビ」へと出世する道のりを歩みはじめた契機を突き詰めるならば、40年を隔てて2人の非凡な旅行作家が出版した作品によるところが大きい。
>
> 1887年、ボヘミアの記者・ジャーナリストであったラフカディオ・ハーン（1850-1904）は『ハーパーズ』誌から依頼され、風光明媚なフランス領インド諸島の記事を書くことになった。(20)

ハーンがニューオリンズで書いた記事について注目している。

> ヴドゥ(Vodou) の女王マリー・ラヴォーと、彼いわく「ヴドゥ信徒の生き残り、セネガル生まれの呪い師、代々受け継がれきた魔法使いの家系の最後の重要人物」であるバヨウ・ジョンの死を報じたものがある。ハーンは「黒人の信者たちが今後も代々の女王と神官を選出し続けていくことは疑いないだろう」としながらも、「学校教育の影響で魔術信仰はだんだんと失われつつある」と哀しげに書き残している。(21)

ハーンはもちろん、明治時代に来日し、現在の東京大学で教鞭をとり、その後小泉セツと結婚し、小泉八雲となった、あのハーンである。ハーンの "The Country of the Comers-Back" (1889) は Peter Haining, editor. *Zombie* (1985) に収録されている。なお、ハーンは "zombi" と表現している。(22)

「ゾンビとは何か」をラックハーストは次のように述べている。

> ゾンビは超自然的な力、あるいは疑似科学の力といったものにより生き返った不死者の一種だ。喋らず、知性を持たず、生前の記憶や感情も持たず、個性のない群れとしての行動し、爆発的に増殖する。決して満たされることのない、むなしい飢えに突き動かされ、最後の人類を食らい尽くすまで感染を広げ、勢力を増していく。キリスト教的終末論のごとく、すべての死者が蘇る・・・ただし、腐っている。それがゾンビである。(23)

非キリスト教文化圏で誕生したゾンビが、欧米で人気を博すのは、ドキュメントから創作的な面が付け加えられ、映画を代表とするエンターテイメントの要素が加わっているものである。

3　エンターテイメントとしてのゾンビ

ゾンビがエンターテイメントとして人気を博したしたのはおそらく映画であろう。ここではおもな映像、イベントを取り上げておきたい。

1920 年　ロベルト・ヴィーネ監督『カリガリ博士』（ドイツ）[24][25]

※「本作をゾンビ映画の始祖と位置付けることも可能だ」[26]

1930 年　ウォルター・フラッター『キュリオシティーズ』（アメリカ）

※農作業するゾンビが紹介される。

1932 年　ケネス・ウェッブ『ゾンビ』（アメリカ）

※舞台化。

1932 年　ヴィクトリー・ハルペリン監督『ホワイト・ゾンビ』（アメリカ）

※世界初のゾンビ映画。[27][28] ホラー映画のひとつとしての位置付け。邦名で『恐怖城』と表現されることがある。

※Early Caribbean travel literature occasionally mentioned voodoo rites and transmitted snippets of zombie lore, but even as late as 1928 folklorist Elsie Parsons mentioned that the “zombie” was virtually unknown outside of Haiti. William Seabrook captured them to instant fame with his 1929 travel book *The Magic Island*, and after Kenneth Webb’s 1932 New York stage production *Zombie* the creature fell irrevocably under the auspices of the entertainment industry.　A month after the play opened,

the Halperin brothers began work on a film adaptation, *White Zombie*, and despite a suit brought against them by Webb, the movie opened in the summer of 1932.[29]

1933年　トーマス・ベントレー監督『リビング・デッド』(アメリカ)

※舞台劇の映画化。

※ゾンビは登場しない。[30][31]

1933年　T・ヘイズ・ハンター監督『月光石』(イギリス)

※原題は *The Ghoul.* エジプトの宝石エターナル・ライトが死後の蘇りの原因。

1935年　ジョージ・ターウィリガー監督『オウアンガ』(アメリカ)

1936年　エドワード・ハルペリン、ヴィクター・ハルペリン監督『ゾンビの反乱』(アメリカ)

1940年　ジョージ・マーシャル監督『ゴースト・ブレーカーズ』(アメリカ)

1941年　ジョージ・マーシャル監督『死霊が漂う孤島』(アメリカ)

1943年　ジャック・ターナー監督『私はゾンビと歩いた！』(アメリカ TV)

1959年　エド・ウッド監督『プラン9・フロム・アウタースペース』(アメリカ)

※SF映画。宇宙人がゾンビを作り出す設定。

1964年　ウバルド・ラゴーナ監督『地球最後の男』(アメリカ・イタリア)

1966年　ジョン・キリング監督『吸血ゾンビ』(イギリス)

1968年　ジョージ・A・ロメオ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(アメリカ)

※ゾンビの原型を作り上げる。日本では劇場未公開映画。

1971年　アマンド・デ・オッソリオ監督『エル・ゾンビ／落ち武者のえじき』(スペイン)

1974年　ホルヘグ・ロウ監督『悪魔の墓場』(イタリア・スペイン)

1978年　ジョージ・A・ロメロ監督『ゾンビ』(イタリア・アメリカ)

※日本公開は1979年3月。

1979年　ルチオ・フルチ監督『サンゲリア』(イタリア)

1981年　ヴィンセント・ドーン(ブルーノ・マッティ)監督『ヘル・オブ・ザ・リヴィングデッド』(イタリア・スペイン)

1982年　マイケル・ジャクソン『スリラー』(アメリカ)

※13分34秒のミュージック・ビデオ(現在で言うプロモーションビデオ)でゾンビダンスが話題となる。

1985年　リッキー・ラウ監督『霊幻道士』(香港)

※日本でも以降キョンシー・ブームとなる。

※日本公開は1986年4月。

1989年　メアリー・ランバート監督『ペット・セメタリー』(アメリカ)

※ペットのゾンビが中心で登場。

1991年　小水一男監督『バトルガール』(日本)

※海外では*Living Dead in Tokyo Bay*として公開。

2000年　ゾンビウォーク

※Gencom2000(Gen Con gaming convention 2000)、アメリカ・ミルウォーキーで始まる。

2002年　ポール・W・S・アンダーソン監督『バイオハザード』(アメリカ・イギリス・ドイツ)

※原作はゲームソフト。日本公開は2002年8月。

2004年　アレクサンダー・ウィット監督『バイオハザードⅡ　アポカリプス』(アメリカ・イギリス・ドイツ)

※日本公開は2004年9月。

2006年　エリック・フォースバーグ監督『ゾンビ・オブ・ザ・デッド　感染病棟』(アメリカ)

※日本では劇場未公開。

2006年　世界ゾンビの日 (World Zombie Day)[32]

※10月10日。

2007年　ラッセル・マルケイ監督『バイオハザードⅢ』(アメリカ・イギリス・ドイツ)

※日本公開は2007年11月。

2009年　ルーベン・フライシャー監督『ゾンビランド』(アメリカ)

2010年　ポール・W・S・アンダーソン監督『バイオハザードⅣ アフターライフ』(アメリカ・イギリス・ドイツ)

※日本公開は2010年9月。

2010年　フランク・ダウボン企画『ウォーキング・デッド』(アメリカTVドラマ)

※2010年11月にシーズン1、日本で放映。

2011年　ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの「ハロウィーン・ホラーナイト」(9月23日～10月31日)

※ユニバーサル・サプライズ・ハロウィーン (2011年9月6日～11日3日)

2012年　ポール・W・S・アンダーソン監督『バイオハザードⅤ リトリビューション』(アメリカ・イギリス・ドイツ)

※日本公開は2012年9月。

2013年　マーク・フォスター監督『ワールド・ウォーZ』(アメリカ)

2016年　ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドの新アトラクション「ザ・ウォーキング・デッド」開始。

2016年　ヨン・サンホ監督『新感染　ファイナル・エクスプレス』（韓国）

※日本公開は2017年9月1日

2016年　佐藤信介監督『アイアムアヒーロー』（日本）

2017年　ポール・W・S・アンダーソン監督『バイオハザード：ザ・ファイナル』（アメリカ・イギリス・ドイツ）

※日本公開は2016年12月23日と先行上映。

2017年　上田慎一郎監督『カメラを止めるな！』（日本）

※一般公開は2018年6月23日

2019年　外崎春雄監督『鬼滅の刃』（日本）

※吾峠呼世晴原作のテレビアニメ。2019年4月～9月放映。

※原作は『週刊少年ジャンプ』2016年2月15日～2020年5月18日連載。

※外崎春雄監督『劇場版 鬼滅の刃 無限列車編』（2020年10月16日公開）

※鬼が登場するが、鬼の血より人間がゾンビ化する。

2019年　木村ひさし監督『屍人荘の殺人』（日本）

※2019年12月13日公開

シーブルック『マジック・アイランド』（1929）の発表の後、1931年には映画界ではトッド・ブラウニング監督『魔人ドラキュラ』（1931、アメリカ）、ジェイムズ・ホエール監督『フランケンシュタイン』（1931、アメリカ）ともにユニバーサル・スタジオで製作されたのである。

ゾンビ映画はコンスタントに作られ続けたにもかかわらず、ゾン

ビというモンスターがホラー映画ファンの間で人気を得ることはなかった。ゾンビは名前を持たない蘇った死者の集団であり、ドラキュラ伯爵やフランケンシュタインの怪物のような固有のキャラクター性に欠けるため、ホラー映画のモンスターとしては常に二線級だったのだ。

ゾンビがジャンルを代表するモンスターに成長するのは、60年代に『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』が登場し、80年代のスプラッター・ブームを経て以降のことだ。(33)

ゾンビ映画について水野隆志は次のように述べている。

ゾンビがデビューした30年代は、ファンタジーが優勢だった。ブードゥーの秘術が人気を呼んだのもこの傾向と無縁えはない。

ところが戦争を挟んで50年代に入るとファンタジーは下火になり、SFが台頭する。何しろ科学文明が飛躍的な発展を遂げていた時代、原子力や宇宙開発の時代に魔法が流行するはずもない。

ゾンビもこの影響を受けて変化を余儀なくされる。蘇生の理由に宇宙線や放射能など、科学的な設定が持ち込まれるようになるのだ。ただ、甦った後の姿はそれほど大きな差はなく、のろのろと動く死体に過ぎなかった。使役者に操られた存在であり、自立性はない。人を食ったり、仲間を増やしたりることもなかった。(34)

ゾンビはブードゥー教から離れ独自の道を歩き始める。ゾンビには意志もなければ性格もなかったものが、エンターテイメント化されると様々な要素が加えられていく。

・吸血鬼のように噛みつかれたものがゾンビ化する。

・宇宙人がゾンビを作る。
・宇宙の光線や謎の細菌等によりゾンビ化する。
・謎の病原菌類によって感染してゾンビ化する。
・理由はわからないが死者が蘇る。
・生前後の性格などを持ったままゾンビ化する。

死者が蘇るものを全体的にゾンビと称する場合がある。ゾンビのステレオタイプを構築したのがロメロ監督『ゾンビ』(1978) である。ロメロは「人肉嗜好と増殖性」「同族化は知性を喪失した本能剥き出しのモンスター」(35) としてのゾンビを確立したのである。

> 人体損傷とゴア描写にさらに磨きをかけたゾンビ映画群が、雨後の筍のごとく量産されることになった。感染症や被爆の結果など、厳密には「甦った死体」と言えないものであっても、カニバリズムと伝染性を備えていればゾンビと見なすファジーな風潮が一般化したのも、この頃からだ。(36)

ゾンビがひとつのブームになる背景としては埋葬方法を無視することができない。日本もかつては土葬がメインであったが、現在は火葬がほとんどだ。埋葬と宗教は密接な関係にある。日本の場合には仏教にしろ神道にしろ、身体といった実体以上に魂や霊魂などが重視される。これに対してキリスト教では身体が重視される。イエス・キリストの復活に象徴されるが、身体が重要ということになる。またイエス・キリストによるラゾロの復活もしかりだ。このために土葬されるのだ。この習慣がなければゾンビそのものが受け入れられないだろう。エンターテイメントでは既成概念と全く異なるものは大衆が魅了されるのだ。Ozzy Inguanzo. *Zombies on Film* (2014) ではハルペリン姉弟の映画製作に触れ、次のように述べている。

But they recognized the public's growing interest in the horror genre, and decided to embark on an original property that would exploit America's newfound curiosity in voodoo lore. The idea for the Halperin Brothers' new film originated from the pages of William Seabrook's 1929 nonfiction travelogue about his exotic adventures in Haiti, *The Magic Island*. It recounted dark tales of native voodoo rites essentially brought the dead back to life as zombies. But Seabrook's shocking first-person accounts were extraordinary, and nothing like the miraculous narratives Westerners had been familiar with, such as Jesus Christ's divine resurrection of Lazarus as depicted in the Holy Bible's Gospel of John. Zombies were reanimated corposes without souls, bodies without any physical liberty or personal autonomy. They existed at the mercy of voodoo sorcerers and functioned as servile labor. Seabrook's lurid encounters challenged science and defied religion, so naturally the public was captive. (37)

しかし彼らは〈ホラー映画〉人気の高まりに着目し、当時アメリカで話題になりだしたばかりのブードゥー教を扱ったオリジナル作品をつくろうと決意する。この新しい映画のアイディアはウィリアム・シーブルックがハイチのエキゾチックな体験をつづった旅行記『The Magic Island』から生まれた。同書ではハイチの民間信仰ブードゥーの儀式が死者をゾンビとして蘇らせる暗い物語が語られたいた。これがショッキングだったのは、聖書『ヨハネによる福音書』に記されているイエス・キリストによるラザロの復活といった、西洋の人々が慣れしたんできた奇跡の物語とはまるで異なっていたからであり、また「体験記」としての生々しさ

もそれに拍車をかけた。〈ゾンビ〉は蘇った死体、魂のない抜け殻であり、意思を持たず、体もまともに動かせない。彼らはブードゥーの術を操る者によって、労働力としてこき使われるためだけに生かされている存在だった。シーブルックが遭遇した不気味な儀式は科学で説明できず、またキリスト教の教えにも反するものでったので、当然のごとく大衆はそれに魅了された。(38)

ホラー映画（恐怖映画）の代表と言えば、ドラキュラ、フランケンシュタインの怪物が代表であるが、噛みつきにきにより感染していく、死体が動くといった古典的な設定がゾンビ映画では受け継がれているが、エンターテイメントとしてゾンビ映画は特殊メイクの格段の進歩と共に、いわゆる VFX とは異なるリアルさがある。これ以外には死者が蘇るものとしてミイラがある。アメリカの現在のゾンビブームはいつからなのだろうか。

やはり今のブームの始まりは、2002 年以降でしょう。いわゆる〝9・11 以降〟の荒廃した世界ですよね。だからゾンビといっても、ポスト・アポカリプス（終末の後）の物語なんです。ゾンビブームが起こる前は 20 世紀末＝世紀末で、破滅が来るよという空気が流れていた。(39)

なお、日本の場合には映画の公開にあたっては映倫の審査を受けるわけだが、『ゾンビ』(1978) をはじめ、人体損壊をメインにしたコナン・ル・シレール監督『ジャンク　死と惨劇』(1979) がこれに触れることなく上映されたことにより、「人間の死に様はスクリーンを飛び越え、ビデオからテレビのバラエティまで、あっという間にお茶の間を侵食した」(40) のである。しかし、1988 年から 1989 年に起きた東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件により、その後 10 年

程度はオタクを含め、ホラー的なものはバッシング受けた経緯がある。2020 年 3 月には新型コロナウィルス感染症がパンデミックを引き起こし、ゾンビ映画を含め、感染が引き起こすホラー的なものの放映は自粛されている。

4　コスプレになったゾンビ

ハロウィーンの仮装はイベン化により多様化してきた。日本でハロウィーンを早い時期に紹介した田村哲『外遊九年』(1908) がある。[41] その中でもアメリカのハロウィーンの様子が紹介されている。
その中で仮装の様子が描写されている。

> 其の他假装舞踏會もハロウイーンに開かれることがある、即ち男はヂョルジ、ワシントンの假装をしたり、フランクリンの假装をしたり、女は昔の女王に扮装たり昔の偉らい女に扮装たりして、大勢會合して舞踏するが、これも仲々面白いものた。[42]

アメリカでもすでにハロウィーンが本来の意味を離れ、イベント化していることが伺える。もちろん、当時のポップカルチャーとして大人や若者がこうした仮装を始めたのは 20 世紀になってからのことだ。[43]

ハロウィーンの仮装はケルト文化に由来するが、その目的は甦った死者が生きている人間かどうかわからなくするための仮装なのだ。従って死者の仲間である格好が必要だということだ。[44] メキシコの「死者の日」やガイ・フォークスディでも仮装又はいつもと異なった格好をしていた。[45] ハロウィーンはその起源のところから見ても死者とのつながりを無視できない。それゆえ、仮装でもこうし

た死者と関連のあるものが取り入れられているのだ。

> But attending these lively carnival images－always－are the classic images of mortality and the grave: skeletons, vampires, zombies, and ghosts. The grand marshal of the Halloween parade is, and always has been, Death. (46)

もともとケルト文化にはなかったゾンビがハロウィーンの仮装として登場してきたのがいつからであったのかを特定することはできないが、その要因はいくつか考えられる。エンターテイメントとしてジョージ・ロメロ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968、日本未公開)、『ゾンビ』(1978)、マイケル・ジャクソン『スリラー』(1982) は広くゾンビを広めたことに大きく貢献したと言ってよいだろう。『ゾンビ』(1978) の舞台がショッピングモールである点も無視できない。マイケル・ジャクソンはゾンビダンスとも称される新しいスタイルも生み出した。

2000 年以降には 3 つの流れがある。第 1 はゾンビウォーク、第第 2 はゾンビ映画・映像、第 3 に USJ のハロウィーン・ホラーナイトである。

第 1 のゾンビウォークは 2008 月の Gencom2000、それからさらに 2006 年には世界ゾンビの日としてアメリカのピッツバーグで行われたゾンビのイベントとして以降定着している。ロメロ監督『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968) が 10 月 1 日に公開されたことを記念して、10 月 10 日が「世界ゾンビの日」となったが、10 月 31 日のハロウィーンもあることから、世界ゾンビの日はゾンビウォークに特化したもののその影響が死者の甦りの祝祭の意味を持つハロウィーンに影響したとしても不思議ではない。

第 2 のゾンビ映画はロメロのゾンビ映画によって世界中に一大ブ

ームを起こし、21 世紀になるとゲームによりゾンビブームの再来を巻き起こした『バイオハザード』(2002) がある。

> 2003 年刊行の『ゾンビ映画大事典』では、約 350 本のゾンビ映画を紹介した。その作品リストが『ホワイト・ゾンビ』にはじまり、2002 年の『バイオハザード』で終わっているのは、偶然とはいえ象徴的なことかもしれない。人気ゲームを映画化した『バイオハザード』のスマッシュ・ヒットから、再びゾンビ映画が作られるようになり、80 年代を超える空前のゾンビ映画ブームが巻き起こったからである。作品的な評価はさておくとして、『バイオハザード』の興行的な成功は、ゾンビ映画新時代の幕開けだったといっても過言ではないだろう。(47)

その後シリーズ化された。ゾンビはゲームによって若者の興味・関心を捉えたポップカルチャーのアイテムにまで成長したと言ってもよいだろう。特にアメリカでは顕著である。(48) ここ数年の大ヒットを飛ばしているのが、アメリカの TV ドラマ『ウォーキング・デッド』(2010) シリーズである。2019 年までシーズン 10 まで放映された。清水崇はゾンビにはまってしまう理由として次のように述べている。

> 「地獄がふれて死者がこの世を歩き回る」っていう台詞がはやり秀逸だと思います。理由もなく死者が蘇ったときのパニック状態から人間同士の諍いまで、すえての希望の行きどころが変わってしまう凄まじさですね。(49)

日本では石田スイのマンガ『東京喰種トーキョーグール』が『週刊ヤングジャンプ』に 2011 年 41 号から 2014 年 42 号まで第 1 部と

して発表され、その後も第2部が発表されるとともに映画化もされた。

第3はUSJのハロウィーン・ホラーナイトである。2011年からはじまったこのイベントはUSJが苦肉の策で考え出したイベントで、2011年9月6日～11日3日と時間と期間限定で行われた。USJの特定場所に特殊メイクを施したゾンビ集団が登場するイベントである。設備投資や機械やシステム調整のいらない、新しい設備投資しないマンパワーによるイベントである。

現在のゾンビブームについて中原昌也は次のように述べている。

> 日本でも馬鹿騒ぎの方便として定着したハロウィンで多くの若者はゾンビの仮装をする。顔に下手くそな傷のメイクをして、ボロボロの服を着て、ゾンビウォークをする。その様子は真のゾンビ・・・麻薬によって意思を奪われ百姓をやらされているハイチのリアルゾンビと同じだ。(50)

仮装には変身願望、非日常化がある。中原はさらに次のようにも述べている。

> ゾンビにミッキー・マウスやスーパーマリオのようなキャラクター性はない。映画においても、登場人物がゾンビに噛まれて変身することこそあれ、それがフランケンシュタインの怪物のようにすーパーな存在になるわけではない。ゾンビになることことで没個性化するだけだ
>
> このキャラクター性を排除するところに現在ブームになっているゾンビゲームの不健全性があるように思える。ゾンビ映画は数多くあるが、その一部の例外を除いてゾンビはただの総称であり、誰が演じても問題がない。それでいて映画の主役のように振舞っ

ている。この倒錯は一体何なのだろうか？[51]

ゾンビの魅力について、岡本健『大学で学ぶゾンビ学』(2020) では次のように述べている。

> ゾンビがほかのモンスターと大きく違うのは、ゾンビがもはや「他者」でありながら、元は我々と同じ人間である点だ。もしかしたら知り合いや家族、そして、自分もそうなってしまうかもしれない存在である。非人間でありながら、人間と地続きなのだ。
> つまり、ゾンビは、人間や社会の姿を映し出す鏡のような存在であると言える。鏡は不思議な存在だ。自分の姿が反転して見える。これは、実際に人から見られている自分の姿に近くあるが、そのものではない。自分が見ている鏡に映った自分はとても奇妙で、みたいような、見たくないような、目を背けたくなるように、見入ってしまうような、そんな存在である。[52]

ゾンビの仮装は主としてオドロオドロしたグロテスクな面がある一方で、日本特有のグロテスクにカワイイ要素を盛り込んものさえ登場している。マンガでも里見美代子『晴ときどきぞんび』(主婦と生活社、1991)、荒木宰『今からゾンビ』(小学館、2016) をはじめ決して少なくない。ファッション誌『S Cawaii! Beauty』(第 2 号、2014 年 9 月 29 日) では「特集：ゾンビメイク基本のき」が組まれ、きゃりーぱみゅぱみゅは 2015 年 9 月 2 日リリースした『Crazy Party Night～ぱんぷきんの逆襲～』ではゾンビダンスが入っている。こうしたことからも少なからずハロウィーンの仮装に影響を与えているかもしれない。[53]

5　日本人が子どもの頃から知っていたゾンビ

ここで言う「子どもの頃から知っていたゾンビ」とは、必ずしも「ゾンビ」という名称ではない。概念として「死人（死体）が蘇る」という点が重要だ。日本のマンガ、アニメ、実写ものでは、実はこうしたものは早くからあった。典型的なものは『仮面ライダー』（1971）からスタートした一連の仮面ライダーシリーズは、改造人間という発想からスートしたため、サイボーグ的な要素が強かった。しかし、科学や呪術的ものが取り入れられ、悪の組織もショッカーから始まり、ブラックサタン、クライシス帝国、アンノウン、アンデッドという名称になっている。当初は改造人間から始まったものの、死者が蘇る、復活するなどの設定が加わっている。仮面ライダーシリーズ後は『ゴレンジャー』に始まる、戦隊シリーズでも同様なことがみられる。仮面ライダーシリーズや戦隊シリーズにしても、そこに登場する群れるゾンビは単なる兵士となり、命令されるままに動く道具となり、意思を持つ怪人は特殊能力や怪力の持ち主の場合が多い。女の子向けのものも TV アニメ『セーラームーン』(1992) や TV アニメ『ふたりはプリキュア』（2004）などもシリーズ化され、やはり怪人は登場するが、仮面ライダーシリーズや戦隊シリーズに比べると、女子向けという点もあり、エグさはかなり弱められている。最近では『週刊少年ジャンプ』で 2016 年 2 月 15 日～2020 年 5 月 18 日連載された吾峠呼世晴『鬼滅の刃』は 2019 年にはテレビアニメ化された外崎春雄監督『鬼滅の刃』が注目に値する。鬼が登場するが、鬼の血より人間がゾンビ化する内容である。

日本人は子ども頃からすでにゾンビという表現は知らないにせよ、戦闘もので死者の復活、蘇りなどを扱ったコンテンツに触れてきたのである。ここに妖怪や幽霊のようなものまで、日本のコンテンツにはこうしたものがあふれていたのだ。こうした土壌で育った若者たちが知性や意思を持たない群れるゾンビをどうとらえたのか。ゾ

ンビが単に本能だけで動くとすれば、それは我々が日常生活では絶対にできないことをやってのけることになる。日常生活の中で強いストレスや恐怖心を受けると、人は思考することをやめ、言われたことだけをするようになる。ゾンビの外見に憧れるかどうかは別にしても、個のないゾンビにどこか惹かれるのは、子ども時からの見てきた怪人の蓄積と、これまでの社会との係り方により捉え方が歪曲化されていくのではないだろうか。単にエンターテイメントしての恐怖を疑似体験できるお化け屋敷やゾンビ屋敷が流行るのも、こうした背景があるのかもしれない。岡本健『大学で学ぶゾンビ学』（2020）では次のような指摘がある。

> ゾンビは、自分がそうなるかもしれない、大切な人がそうなるかもしれない、という想像力を喚起する存在なのだ。そうすると、そうした存在との「共存」があり得るのかどうか、ということに考えが至るのは容易に想像できる。(54)

バーチャルではなくリアリティ志向は、ネット社会が進めば進むほど、より強いものとなるのではないだろうか。

エピローグ

ハロウィーンは死者の魂が蘇る日でもある。異界から死者が戻ってくるという前提がある。しかし、ゾンビは死者の国、異界から戻ってくるのではなく、単に死体が動くというところが主眼だ。英語で表現される“the living dead”である。火葬が習慣化したところではあまり馴染まないというよりは、ホラー的なエンターテイメントとして定着した。

ハロウィーンがアメリカの渡ると、イベント化が進み、その中で

仮装の様相も変化してきた。必ずしも死者とは関係のないものになりきる単なる仮装パーティーの様相を呈していた。エンターテイメント、パフォーマンスとしてイギリスが演劇の国、ロシアがバレエの国、イタリア・ドイツがオペラの国とすれば、アメリカは映画の国だ。それだけに映画の持つ影響は大きい。それは『スターウォーズ』だけを見ても、突出している。『ゾンビ』(1978)、『バイオハザード』(2002)、『ウォーキング・デッド』(2010〜)はホラー映画(恐怖映画)の中で「ゾンビ映画」というひとつのジャンルの代表作であることは間違いない。こうした影響のもとに新しくできたイベントがゾンビウォークだ。ハロウィーンの仮装では、ある特定のキャラクターに扮するコスプレ、ゾンビの仮装は「ダークサイドを楽しむ非日常」(55)である。もちろん、コスプレと仮装とは異なる。(56)コミケで行われるコスプレは通常、マンガやアニメのキャラクターに特化され、かなり水準の高いコスプレヤーが登場する。コミケに集まってくる人々はある種、目は肥えている。こうした人の目にも耐えられるコスプレなのだ。しかし、ハロウィーンのコスプレはこうしたものとは大きく異なる。軽い気持ちで仮装してみたいという人が多い。仮装には変身願望、非日常化を楽しむ、SNSの素材としたいなど、理由は様々だ。これまでの非日常化は、「かっこいいから」「かわいいから」「たまにはこんな風になりたい」などからどちらかと言えばプラス思考の変身願望だ。そこにストレス発散がある。ゾンビの仮装、ダークサイドを楽しむのも、これまでは魔女、悪魔、魔物、フランケンシュタインの怪物のようなものであったものが、どこかうしろめたさを感じながらゾンビに仮装することが起きてきた。そして、その仮装をするにも、手の込んだ特殊メイクもあるが、もっと百円ショップに代表されるが、気軽に購入し、do-it-yourselfできるのだ。ハロウィーンの仮装ですら単体ではっきりとした個性をもつキャラクターではなく、集団でいることではじ

めて大きな意味をもつ「ゾンビ」の仮装をする人の心理は、非日常の中に日常を反映させながらも自己主張しようというますます複雑化する世の中のひとつの姿かもしれない。

注

(1) 佐々木隆「ポップカルチャーとしてのハロウィン」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第 13 輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2016 年 3 月) 及び佐々木隆「日本ハロウィン受容小史」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第 17 輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2020 年 3 月)、その他。

(2) 佐々木隆「ハロウィンとコスプレ」(『むらおさ』第 32 号、むらおさ同人会、2020 年 1 月)、pp.12-15.

(3) 佐々木隆「日本ハロウィン受容小史」、p.137.

(4) 鶴岡真弓『ケルトの想像力』(青土社、2018 年 3 月)、pp.431-432.

(5) Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia.* (McFarland, 2003), p.90.

(6) Nick Redfern and Brad Steiger. *The Zombie Book: The Encyclopedia of the Living Dead* (Visible Inc. Press, 2015), p.129.

(7) Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia*, p.57.

(8) David J. Skal. *Halloween: The History of America's Darkness Holiday* (Dover Publications, Inc., 2002), p.185.

(9) Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia*, p.78.

(10) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」(伊東美和・山崎圭司・中原昌也『ゾンビ論』洋泉社、2017 年 1 月)、p.77.

(11) ロジャー・ラックハースト／福田篤人訳『ゾンビ最強完全ガ

イド』(エクスナレッジ、2017年3月)、p.69.

(12) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」、pp.78-79.

(13) Ibid., p.79.なお、William B. Seabrook. *The Magic Island.*についてはhttps://archive.org/details/magicislandbywbs00 seab/page/n9/mode/2upでデジタル化されたものを閲覧することができる。

(14) William B. Seabrook. *The Magic Island.* Brace and Company, Inc., 1919. Digitized by the Internet Archive in 2015. p.93. https://archive.org/details/magicislandbywbs00seab/page/n131/mode/2up/search/zombie (access on 20200420)

(15) Ozzy Inguanzo. *Zombies on Film: The Definitive Story of Undead Cinema* (Universe Publishing, 2014), p.16.

(16) オジー・イングアンソ/高橋ヨシキ監訳『ゾンビ映画年代記』(バイインターナショナル、2015年8月)、p.16.

(17) ノーマン・イングランド談/岡本敦史構成「おさらい『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』以前のゾンビ史」(ノーマン・イングランド監修『【決定版】ゾンビ究極読本』洋泉社、2019年12月)、p.174.

(18) "BOOKS: The Zombie of Great Peru by Pierre–Corneille Blessebois Interview with translator Doug Skinner" https://www.redfez.net/nonfiction/interview-books-zombie-great-peru-pierre-corneille-blessebois-683 (access on 20200421)

(19) Jamie Russell. *Book of the Dead: The Complete History of Zombie Cinema.* (Updated and fully revised. Titan Books, 2014), p.9.

(20) ロジャー・ラックハースト/福田篤人訳『ゾンビ最強完全ガイド』、p.26.

(21) Ibid., pp.26-27.

(22) Lafcadio Hearn. "The Country of the Comers-Back" Peter Haining, editor. *Zombie*. A Target Book, 1985), p.57.

(23) ロジャー・ラックハースト／福田篤人訳『ゾンビ最強完全ガイド』、p.8.

(24) "Appendix A: Chronology of Zombie Films, 1920-2014" (June Michele Pulliam and Anthony J. Fonseca, editors. *Encyclopedia of the Zombie: The Walking Dead in Popular Culture and Myth*. Greenwood, 2014, p.329)では一番最初にリストアップされている。

(25) 「ホラー映画研究家のデニス・ギルフォードは、『カリガリ博士』⑲をゾンビ映画の始祖に挙げるが、ハイチ伝承を踏まえた厳密な意味でのゾンビ映画は、恐らく『ホワイト・ゾンビ』が最初だろう。(伊東美和『ゾンビ映画大事典』洋泉社、2003年3月、p.28.)

(26) 岡本健『ゾンビ学』(人文書院、2017年4月)、p.69.

(27) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」、p.85.

(28) 伊東美和『ゾンビ映画大事典』、p.29.

(29) Peter Dendle. *The Zombie Movie Encyclopedia*. McFarland & Company, 2001), p.2.

(30) Peter Dendle "Appendix A: Movies Listed by Year" (*The Zombie Movie Encyclopedia*, p.217.)ではゾンビ映画の最初としてリストアップされている。

(31) ゾンビを扱った演劇として Paul-Alex Blesseboi. *Great Peru's Zombie* (1697)があると、*Monsters Zombies Vampires and More* (Parragon, 2012, p.166)には指摘がある。

(32) 「『世界ゾンビの日』ロンドンの街に大量のゾンビが出現!?ハロウィン前の仮装イベント」

https://sekach.com/world-zombie-day-2017/(accesson202004 21)

(33) 伊東美和「ゾンビ映画の源流」Ibid., p.89.

(34)水野隆志「〝ゾンビ〟とは、何か・・・？ゾンビ学入門」（秋山勤編『ゾンビゲーム大全』ホビージャパン、2009 年 3 月）、p.88.

(35) Ditto.

(36) 殿井君人「ゾンビ映画史その系譜」(『ゾンビゲーム大全』)、p.92.

(37) Ozzy Inguanzo. *Zombies on Film: the Definitive Story of Undead Cinema*, p.23.

(38) オジー・イングアンソ／高橋ヨシキ監訳『ゾンビ映画年代記』、p.23.

(39) 風間賢二「ワイドショーでゾンビを取り上げてうれれば、もっと盛り上がるんだけどね」（宮嶋亮太編『語れ！ゾンビ』ＫＫベストセラーズ、2013 年 10 月）、p.60.

(40) 中原昌也「中原昌也、日本公開版『ゾンビ』が蘇る意味を考える」(ノーマン・イングランド監修『【決定版】ゾンビ究極読本』)、p.137.

(41) 佐々木隆「日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン」(『ポップカルチャー・若者文化研究』第 1 号、ポップカルチャー・若者文化研究会、2020 年 2 月）を参照のこと。

(42) Ibid., pp.158-159.

(43) Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia*, p.55.

(44) Nick Redfern and Brad Steiger. *The Zombie Book: The Encyclopedia of the Living Dead*, p.130.

(45) Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia*, p.54.

(46) David J. Skal. *Halloween: The History of America's Darkness Holiday*, p.18.
(47) 伊東美和「かんたんにおさらいゾンビ映画、80年の歴史」(伊東美和編『ゾンビ映画大マガジン』洋泉社、2011年8月)、p.22.
(48) 那須千里「アメリカン・ゾンビカルチャーの変遷&ゾンビ研究書ガイド!」(伊東美和編『ゾンビ映画大マガジン』)、p.307.
(49) 清水崇「日本ホラー映画の旗手・清水崇、『ゾンビ』を語る」(ノーマン・イングランド監修『【決定版】ゾンビ究極読本』)、p.146.
(50) 中原昌也「ゾンビ映画、ジャンルとしての終わり」(『ゾンビ論』)、p.203.
(51) Ibid., pp.203-204.
(52) 岡本健『大学で学ぶゾンビ学〜人はなぜゾンビに惹かれのか〜』(扶桑社、2020年5月)、pp.295-296.
(53) 岡本健『ゾンビ学』、pp.182-183.
(54) 岡本健『大学で学ぶゾンビ学〜人はなぜゾンビに惹かれのか〜』、p.269.
(55) 森岡毅『USJのジェットコースターはなぜ後ろ向きに走ったのか?』 KADOKAWA、2016年4月)、p.65.
(56) 佐々木隆「ポップカルチャーとしてのハロウィン」、p.3.

※「ハロウィーン」と「ハロウィン」の表記が混在するが、佐々木は「ハロウィーン」を主として使用するが、引用等の文献の表記もあり、混在していることをお断わりしておきたい。なお、これまで佐々木も「ハロウィン」の表記を使用していたが、英語の発音から今回より「ハロウィーン」の表記を主とした。

キーワード:ハロウィーン、死者の日、ゾンビ、ホラー映画